

十三世紀の『白氏文集』：藤原定家と高麗文人李奎報とにおける書誌的考察

静永, 健
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 助教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/9585>

出版情報 : 中国文学論集. 34, pp.30-44, 2005-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

十三世紀の『白氏文集』

——藤原定家と高麗文人李奎報とにおける書誌的考察——

静 永 健

一 十世紀の『白氏文集』

『宋史』日本国伝には、雍熙元年「九¹」東大寺の僧奝然による入宋謁帝の事が詳しく記録されている。²奝然は「其の徒五六人」と渡海し、礼物として「銅器」十餘基と日本国の「職員令」³、神代より今上帝（円融天皇）までの王統を記した「王年代記」などを献じたという。

また奝然は華言に通ぜず、筆談を以て応じたというが、彼は歴代天皇のみならず、日本国の産業、氣候、郡や宿駅の数、成年男子の人口までをもつぶさに報告している。就中、我が国に流通している書籍について「国中に五經の書及び仏經、白居易集七十卷有り、並びに中国より得たり」（傍点筆者、以下同じ）との回答は、当時の日本知識層の読書傾向を知る手懸かりとして、極めて貴重な証言と言える。

ところで、歴代数多くの文人墨客を輩出する中国において、唯一白居易の詩文集のみが、このように経書や仏典に伍して、しかも単独で取り上げられるのは、今日より見れば些か奇異な現象である。しかしこの発言は、ただに日本僧なるがゆえの井底蛙的私見では決してないであろう。⁴筆者の結論を先に述べるならば、この奝然の返答は、明敏にも当時の中国本土の文学のありように即し、我が国の文化水準が、周辺諸外国に比して毫も遜色無きことを具体的に示そうとした発言と解すべきである。果たしてこのとき、『白氏文集』は中国において知識人必読必携の第一の文学書として注目を集めていた。例えば九世紀、大中十二年「八⁵」前の進士と考証される張為は、『詩人主

「客図」を著し、白居易を「广大教化の主」としてその第一位に推戴した⁶⁾。また、呉融「貫休彈月集序」（光化二年〔八九一〕）も、張為図の主張を全面的に是として⁷⁾いる。やがて十世紀に入り五代後蜀の韋穀撰『才調集』十巻は、その巻一冒頭および巻五に白居易詩併せて二十七首を抄録するが、更にこの傾向が顕著であるのは、奩然来朝とほぼ時を同じくして編集が始まっていた『文苑英華』一千巻である。この一大勅撰詞華集は太平興國七年〔九八二〕九月編集開始、雍熙三年〔一六六〕十二月に完成したが、うち白氏の作品数は七百餘首にのぼり、他の文人に比べ抜群の大差を以て収録されているのである。奩然の発言には、当時の中国のこのような文化状況がそのまま投影されていたと考えられ、かくして北宋第二代皇帝太宗は、この異邦の仏僧の朝覲を嘉し、彼に完成したばかりの勅版大蔵經一套を下賜するとともに、五台山巡礼の許可などの数々の便宜を与えたのであった。

一方、かかる『白氏文集』重視の傾向は、渤海や新羅、そして続く高麗王朝といった当時の近隣諸国においても同様であったと思しい。市場においてしきりに白詩を購求した「雞林（＝新羅）の賈人」の事は、既に元稹、白氏長慶集序（長慶四年〔八四一〕）に見える有名な挿話であるが、更に我が国菅原道真（八四〇―九〇三）の詩を評した渤海使裴頌言葉「礼部侍郎（＝道真）は白氏の体を得たり」も、白詩を文学のスタンダードとする共通認識が海を越えて存在していればこそ成立する発言である。そして、十世紀の我が国には大江維時（八八八―九三三）によって『千載佳句』が編集されるが、これに相前後する羅末麗初の朝鮮半島においても唐新羅の詩人三十家各十首の七言律詩を選録する『名賢十抄詩』なる書物が編まれていた⁸⁾。この両部の書は、ともに七言詩のみを抄録し、唐詩の名家とともに崔致遠（八六〇?）をはじめとする新羅詩人若干名を含むなど類似点が多いが、やはり白居易『白氏文集』とその周囲の中唐詩人群に抄出の重点が置かれていることに、両者の決定的な同時代性を窺うことができる。

九世紀より十世紀に至る環シナ海・環日本海一帯は、今日より想像する以上にはるかに緊密な文化交流があり、その最も重要な紐帯こそが『白氏文集』だったと言えるのではないだろうか。そして十一世紀のはじまりとともに、我が国では平安王朝文学が開花し、『源氏物語』をはじめとする数多くの文学作品が成立するが、かくいう『源氏物語』における白詩句の頻繁な引用も、この東アジア地域の大きな文化潮流の中で見るならば、それは実に自然な趨勢として捉え直すことも、また可能であるように思われるのである。

関 連 略 年 表

| | 中 国 | 朝 鮮 | 日 本 |
|------|--|---|--|
| 800 | 772 白居易 806 「長恨歌」 816 「琵琶行」 846 | | 844 慧粵『白氏文集』筆写。 |
| 900 | 907 唐滅亡 932 馮道『九經』印刷 960 北宋建国 982 『文苑英華』編纂開始 ● 984 日僧裔然渡宋 ? 北宋版『白氏文集』(摺本) | 858 崔致遠 918 高麗建国 ? | 845 菅道原 真 894 大江千里「句題和歌」 903 大江維時(888～963)『千載佳句』 |
| 1000 | 1036 蘇軾 1045 黃庭堅 1101 1105 | 1011? 高麗版『大藏經』初雕 1071 北宋に正使派遣 | 1004 藤原道長『集注文選』『元白集』を入手して感激す(御堂閔白記) 1086 白河上皇院政開始 |
| 1100 | 1125 1127 南宋 紹興年間(1131～62) 『白氏文集』南宋刊本 陸游 1210 | 1168 1170 鄭仲夫による 武人政權樹立。 1196 崔忠獻の崔氏政權 | 1107 藤原茂明『新樂府』筆写(神田本) 1156 保元の乱・1159 平治の乱 |
| 1200 | 1234 金滅亡 | 1231 高麗、モンゴルに降伏する。 1241 | 1162 藤原定家 1180 以仁王挙兵 1185 鎌倉幕府成立 1221 承久の乱 1241 豊原奉重『金沢本文集』校勘 ① 1231～1232 ② 1236「摺本」③ 1252 |
| 1300 | 1279 南宋滅亡 | | 1274 文永の役・1281 弘安の役 |

二 藤原定家における『白氏文集』

さて、考察の時間軸をくだり（前頁関連略年表参照）、本稿の表題たる十三世紀（厳密には十二世紀末から十三世紀前半）に移って論述を展開したい。本節の中心人物は藤原定家（二二〇―二四一）である。

既に諸先学の研究によって明らかのように、藤原定家は、歌人としてのみならず、歌論や有職故実などの研究者としての業績にも実に見るべきものが多い。更に筆者はここで、我が国において『白氏文集』を精読した屈指の文人の一人として、定家の活動を以下に検証してみたい。十三世紀の日本において『白氏文集』がどのように読まれていたのか。またそれはどのようなテキストであったのか。定家の諸著作は、それを窺い知るに足る恰好の資料となっているのである。

定家と『白氏文集』との関係を知る上で、恐らく最も有名な事例は、彼の日記『明月記』治承四年「二二〇」九月の条に見える「世上に乱逆追討の耳に滿つと雖も、之れを注せず。紅旗征戎 吾が事に非ず」（原漢文）の一節である。傍点の部分は『白氏文集』卷十七「劉十九同宿時淮寇初破」詩「作品番号二〇四」冒頭句「紅旗破賊 吾が事に非ず」に基づく。折しもこの治承四年は以仁王の騷乱（五月）、源頼朝の石橋山拳兵（八月）があり、当該部分はその頼朝追討のため関東に向かう平維盛の事（九月）を記したものである。時に定家十九歳。このことは、彼の『白氏文集』との出会いが早くも十代にまで遡り得ることを示している。

一方、晩年に至っても『白氏文集』は彼の座右に存した。『明月記』寛喜二年「二三〇」十二月三十日、即ち定家六十九歳の大晦日、彼は自身の家系において七十以上の長寿を全うした祖先四十六名を列記するが、そこに「抑も白氏文集の中に多く此の句有り、人生七十稀と」（原漢文）とある。七十古稀の語は、今日では杜甫の詩を典故とすることが知られているが、定家の当時は『白氏文集』に習見する語（白氏も杜詩を典故とするのだが）として認識されていたようである。

次に注目される著作は、建保六年「三三六」定家五十七歳の句題和歌『文集百首』¹⁸である。文集とは『白氏文集』

の謂^①であり、白詩の佳句百題を選んで、それぞれに和歌をつけてゆく趣向のものである。全一百題は、春夏秋冬の前半五十題と、恋、山家、旧里付懐旧、閑居、述懐、無常、法門の後半五十題で構成されている。そもそもこれは慈円僧正（二二五～二三五）の発案により、定家はそれに追隨するかたちでまとめられたものである^②が、定家はただ慈円の句題に漫然と追和しているのではない。例えば、其六十（山家）慈円の句題歌は、

何時解塵網 此地來掩關 （何れの時にか塵網を解き、此の地 来たりて関を掩はん）
 いつよりか すむべき山のいほならむ かつがつとまる我が心かな

とあるが、定家の其六十の句題歌は、

山秋雲物冷 （山は秋にして 雲物冷ややかに）

秋山の岩ほの枕たづねても ゆるさぬ雲ぞ 旅こちする

となっている。これは既に佐藤恒雄氏や雋雪艶氏が指摘しているように^③、定家は慈円句題の出典（「秋山」詩「一〇二〇六」『白氏文集』巻五）全文を知悉し、慈円原題とは別の部分（即ち慈円は最終聯第十三・十四句、定家は第三句）を句題として掲げたものである。定家の『白氏文集』に対する積極的な姿勢が窺われる例である。

さて、ここで『文集百首』に関しては是非確認しておきたいのは、この慈円・定家が基づいた『白氏文集』のテキストの問題である。このことは既に神鷹徳治氏によって究明された事柄^④に属するが、当時慈円をして定家が基づいた白居易の詩集は、中国宋代において出版されはじめた「刊本」（宋刊本、いわゆる摺本文集^⑤）ではなく、それ以前の、恐らく中国においては唐代に書き写された「旧鈔本（唐鈔本）」に由来するものということである。例えば、『文集百首』其六十七（閑居）の句題は、

山林太寂寞 朝闕苦喧煩 唯茲郡閤内 囂靜得中間^⑥

（山林は太だ寂寞にして、朝闕は苦ろに喧煩たり。唯だ茲の郡閤の内ぞ、囂と静と 中間を得たり。）

とある。この詩句は『白氏文集』巻八「郡亭」詩「一〇五六」の結尾四句である。しかし、現在一般に通行している『白氏文集』刊本系統の諸本（宋紹興本・那波本・馬本・汪本）では、

山林太寂寞 朝闕空喧煩 唯茲郡閤内 囂靜得中間 *汪本作「閤」

となり、所掲第二句に重大な異同がある。一方、これを我が国に現存する金沢文庫旧蔵本（現国立歴史民俗博物館蔵）⁽²⁶⁾によつて検すると、まさしく

山林太寂寞 朝闕苦喧煩 唯茲郡閣内 露靜得中間

とあつて慈円・定家所引の本文に一致するのであり、これらの諸事例を根拠として、神鷹氏は慈円・定家所見の『白氏文集』が唐代以来の旧鈔本であつたことを示されたのであつた。

なお蛇足ながら、筆者からも更に一例を補いたい。『文集百首』其三十二（秋）の句題、

殘影燈閃牆 斜月光穿牖 （残れる影は 燈の牆に閃めき、斜めの光は 月の牖を穿てるなり）

は、『白氏文集』巻十、「夢與李七庚三十二同訪元九」詩「〇五三」、第十九・二十句「諸刊本ではひとしく、

殘燈閃閃牆 斜月光穿牖 （殘燈 影は牆に閃めき、斜月 光は牖を穿つ）

に作つてゐる。両者の優劣はにわかには辨じ難いが、ここで定家の没年にやや遅れる建長元年「三四」より同四年にかけての筆抄という宗性『白氏文集要文抄』（東大寺図書館蔵）を繙くと、当該部分はやはり

殘影燈閃牆 斜月光穿牖 （閃字右旁訓注「ホノカナリ」又「キラメク」、左旁訓注「ヒラメク」）

とあり、慈円・定家抄出の本文に一致する。このように『文集百首』所引の白詩は、承和以来我が国において読み継がれ伝承されてきた旧鈔本による本文であることが確かめられるのである。⁽²⁷⁾

三 李奎報における『白氏文集』

定家と生没年をほぼ等しくする人物に高麗王朝後期の文人官僚李奎報（二六〇～三四）がいる。彼の詩文集は『東国李相国集』と称し、奎報最晩年（高宗二十八年）に勅命を以て編集せられた『全集』四十一巻と、没後篋底より発見され嗣子李涵の序を付して同年十二月に急ぎ追補上呈された「後集」十二巻の凡五十三巻が現存しており、現在は『韓国文集叢刊』第一・第二冊として影印出版されている（景仁文化社一九七〇年）。

李奎報が定家と同じく白詩に強い関心を寄せ、『白氏文集』を耽読していたことは、韓国・成均館大学の金卿

東氏の研究によって我が国にも紹介されたところである。⁽³¹⁾ 李奎報の創作活動と、その白樂天への関心のありかたについては、筆者も別稿を用意して、更に詳しく論じる予定であるが、本稿ではまず、李奎報が依拠した『白氏文集』のテキストについてのみ、以下簡潔に報告したい。

李奎報『東国李相国集』（全集四十一巻、後集十二巻）に見える白詩の影響として特徴的なことは、合計三十四首をかぞえる次韻詩である。いま金卿東氏の示教を得て判明した詩題、およびその原唱たる白居易の作品を列記すれば次の通りである（上段が李奎報詩、下段が白居易詩）。

| | | | |
|-----------------------------|-------|----------------------|----------------|
| 01 〓 02 訪盧秀才永祺用白樂天韻同賦・復和 | 全集卷七 | 白「歸履道宅」 | 後集卷五十七 2725 |
| 03 六月十七日訪金先達軾用白公詩韻賦之 | 全集卷八 | 白「曲江感秋二首」其一 | 卷十一（感傷） 0573 |
| 04 金君乞賦所飲綠盜孟用白公詩韻同賦 | 全集卷八 | 白「對酒」 | 卷十一（感傷） 0470 |
| 05 初秋又與文長老訪金轍用白公詩韻各賦早秋詩 | 全集卷八 | 白「江樓月」 | 卷十四（雜律） 0761 |
| 06 又用白公韻賦文長老草履 | 全集卷八 | 白「宿清源寺」 | 卷八（閑適） 0338 |
| 07 白天院黃華家賦海棠用樂天詩韻（李秀才同賦） | 全集卷十三 | 白「以詩代書寄戶部楊侍郎勸買東隣王家宅」 | 後集卷六十六 3272 |
| 08 次韻文長老朴還古論槿花并序 | 全集卷十四 | 白「夢與李七廩三十二同訪元九」 | 卷十（感傷） 0922 |
| 09 〓 23 次韻賦和白樂天病中十五首并序 | 後集卷二 | 白「病中詩十五首并序」 | 後集卷六十八 3408～22 |
| 24 〓 26 又和樂天心身問答三首 | 後集卷二 | 白「自戲三絕句」 | 後集卷六十八 3408～82 |
| 27 又和假滿百日停官自喜詩 | 後集卷二 | 白「百日假滿少傅官停自喜言懷」 | 後集卷六十八 3490 |
| 28 次韻白樂天出齋日喜皇甫十早訪 | 後集卷二 | 白「出齋日喜皇甫十早訪」 | 後集卷六十九 3675 |
| 29 觀白樂天集家釀新熟每嘗輒醉妻妾等勸令少飲之詩…… | 後集卷二 | 白「家釀新熟每嘗輒醉……」 | 後集卷六十四 3121 |
| 30 次韻白樂天老來生計詩 | 後集卷三 | 白「老來生計」 | 後集卷六十六 3248 |
| 31 次韻白樂天負春詩 | 後集卷三 | 白「負春」 | 後集卷六十四 3112 |
| 32 次韻白樂天春日閑居（三月二十日作） | 後集卷三 | 白「春日閑居三首」其一 | 後集卷六十九 3611 |
| 33 次韻白樂天在家出家詩 | 後集卷三 | 白「在家出家」 | 後集卷六十八 3463 |
| 34 看汁酒用樂天韻 | 後集卷三 | 白「會昌元年春五絕句」其四 | 後集卷六十八 3486 |

次韻とは、既詠の作品の押韻字（偶数句末、時に第一句末も含む）を固定したまま、全く新しい詩歌を創作する。近体漢詩独特の作詩法である。その対象には、白居易のような古人の名作のみならず、目前の相手の贈詩に対し、文字通り「即席」に応酬される場合もあり、元稹・白居易の中唐期に試みられ、以後宋代に大いに流行したものである。李奎報の次韻詩もかかる宋代の風習に準拠したものと考えられるが、筆者は、この李奎報次韻詩のうち僅一例ではあるが彼が目撃した『白氏文集』の本文系統を知る重要な事例を発見した（本文中、ゴシックは押韻字）。

初秋又與文長老訪金轍用白公詩韻各賦早秋詩

李奎報（『東国李相国全集』巻八、右表の05）

初秋 又た文長老と金轍を訪ひ、白公の詩韻を用て各おの早秋の詩を賦す

| | | | | | |
|---------|---------|----|------------|--------|-----------------|
| 銀箭初驚漏漸遲 | 撐林朱實燦離離 | 銀箭 | 初めて驚き | 漏漸く遅し | 撐林の朱実は燦として離離たり |
| 輕絺龍薄身先認 | 團扇恩疎手始知 | 輕絺 | 龍の薄きを | 身は先づ認め | 團扇恩疎にして手に始めて知りぬ |
| 碧樹露寒蟬嘒曉 | 畫梁泥盡燕歸時 | 碧樹 | 露は寒し | 蟬嘒の曉 | 画梁泥は尽きて燕歸る時なり |
| 要看詞客偏多感 | 宋玉悲辭吏部詩 | 要し | 詞客の偏に多感なるを | 看んとせば | 宋玉が悲辭吏部が詩ならん |

この李奎報の詩は『白氏文集』巻十四に見えるの次の詩「〇六一」を原唱とする。

江樓月

江樓の月

白居易（明・馬元調本『白氏長慶集』による）

| | | | | |
|---------|---------|----------|----------|-----------------|
| 嘉陵江曲曲江池 | 明月雖同人別離 | 嘉陵の江曲と | 曲江の池と | 明月は同じと雖も人別離す |
| 一宵光景潛相憶 | 兩地陰晴遠不知 | 一宵の光景 | 潜かに相憶ふも | 兩地の陰晴 遠くして知らず |
| 誰料江邊懷我夜 | 正當池畔望君時 | 誰か料らん | 江辺に我を懷ふ夜 | 正に池畔に君を望む時に当たるを |
| 今朝共語方同悔 | 不解多情先寄詩 | 今朝 共に語りて | 方に同に悔ゆ | 多情 先づ詩を寄す解はざりしを |

ここで問題となるのは双方の押韻字である。偶数句末は「離・知・時・詩」と正確に韻字が一致するが、白詩第一句末「池」字（上平声支韻）は、李詩では「遲」（上平声脂韻）に代わっているのである。このことは、一つには李奎報が白詩第一句末の押韻を考慮しなかったとする見方も可能であるが、ここに『白氏文集』諸刊本の字句異同を検すると、それはまさしく宋刊本の本文をそのまま適用したためであることが判明する。すなわち、宋刊本（宋紹興本・那波本）によれば、白詩第一聯は、兩本ともに

嘉陵江曲江遷 明月雖同人別離

に作り、李奎報はこれらと同系統にある宋刊本『白氏文集』によって次韻字を確定させていたことになるのである。ちなみに「遲」字が誤りで、正しくは「池」であることは、これが唐長安城南隅の著名な行樂地の名であること、第二に明清代の刊本（馬本・汪本）がいずれも「池」字に訂正していることによっても疑いないが、第三に本稿第一節にも既述した北宋初期所編『文苑英華』卷一五二「天部・雜題月」に収録する該詩（詩題は「江樓望月」とする）も「池」字にしていることによっても証明される。「遲」字は宋刊本固有の一次的な誤刻であったのである。

なお、この異同については更に興味深い校勘資料が存する。金沢文庫旧蔵『白氏文集』（現歴史民俗博物館所蔵）卷十四の当該箇所は、第一次転写時の本文を間違いないく「嘉陵江曲々江池」とするが、嘉禎二年（三三六）の第二次校勘時には右旁に「遲摺本」の校注が施されている。このことから、李奎報たち十三世紀の高麗文人が主として目睹した『白氏文集』は、間違いなく当時中国より流入していた宋刊本であったことが確認されるのである。

四 抄本の日本、刊本の朝鮮

十三世紀前半、日本と高麗両国の文壇では、ともに『白氏文集』が読まれていた。しかし、そのテキストには明らかな相違が見られた。すなわち、九、十世紀以来の古い抄本による日本と、新たに中国宋代に開版された宋刊本に基づく高麗という図式である。筆者には、これを以て無闇に我が国のテキストの優位を誇るつもりは無い。しかし、この差異は極めて微小な事例ではあるが、のちの日・中・朝三地域の文化形成の大きな分岐点を示唆しているようにも思われる。

藤原定家たち日本の知識人たちが、承和以来の旧鈔本を尊重した背景には、日本独自の文化受容のスタイル、また限界に拠るところが大きいであろう。周知の通り、我が国の文学作品は、紀貫之（八七二〜九四六）以来「仮名」による創作を増加させていったが、そのことは中国において発明された印刷技術の導入を著しく阻む結果となった。つまり十三世紀のこの時、写本と刊本とが併存した当時の中国・高麗の状況に比べ、日本ではいまだ大部分が筆写

による書物流通に委ねられていたのである。しかし、このことが却って我が国の旧鈔本を温存する防壁の役目を果たしたのである。次に、第二の理由として見逃せないのが、現在は神田本新樂府や上述の金沢文庫旧蔵本などに見られる訓点の存在である。旧鈔本には後世「菅家点」もしくは「江家点」と呼ばれる訓詁が付与されているものが少なくないが、この利便性は、字間が密着し、かつ行間に黒々と罫線をもつ宋刊本では補うことの難しいものである。そして第三の理由としては、本稿第二節でも触れた『源氏物語』等十一世紀の和文学の存在が挙げられる。「ふるき枕ふるき衾誰と共にか」(源氏・葵)の一節に代表されるように、定家にとっては紫式部や藤原公任らが依拠したテキストこそが最も望ましい『白氏文集』であり、想像するに、当時新たに渡来した中国の「摺本」は、それまでの旧鈔本と比べて異文を多く含むいさか訝しい存在に思われたのではなからうか。かくして、我が国にはその後も一貫して平安期の旧鈔本が重視され、大切に保存、転写されることになるのである。

一方、高麗文壇においては、その中国(宋朝)との地理的な近さのゆえに、宋刊本の流入が比較的容易に、かつ大量に行われていた。しかも、日本の『源氏物語』『和漢朗詠集』のような自国古籍による本文の固定化も少なく、従って高麗朝鮮においては、唐抄本より宋刊本に移行する際の微細な誤刻や随意的文字の改変に気付く余裕がほとんど無かったと推測される。ここにおいて十三世紀、日本と朝鮮半島双方の『白氏文集』には、テキスト面での系統的な相違が生じたのである。³⁷⁾しかし、印刷技術の滲透による高麗文壇の精力的全面的な中国文学受容は、やがて独自の漢文学の伝統を確立し、次の李氏朝鮮王朝に至って徐居正(一四一〇—一四八二)らによる『東文選』『東国通鑑』の編述、詩文評論『東人詩話』の成立に至る。朝鮮半島の漢文学は、李奎報以後徐々に高まりを見せてゆくのである。他方、我が国においては、まさしく藤原定家にその典型が見られるように、中国典籍から得た知識と感性は、次第に部分的、断片的なものに限定され、やがて和文学の中に吸収されてゆくように見受けられる。このことは、白詩に学び自らも漢詩人として活躍した九、十世紀の菅原道真たちとは対照的な存在であった。本稿中、数次にわたって言及した『文集百首』其五十五(恋)の定家句題歌は、次の通りである。

舊枕古衾誰與共 (旧き枕古き衾 誰とと共にか)

床のうへに 旧きまくらもくちはてて かよはぬ夢ぞ とほざかりゆく

旧鈔本「長恨歌」に基づくこの句題歌は、白詩原作についての単なる翻訳の範疇を超え、すでに新たな創作の領域に達していると言つべきであろう。我が国における中国文学の受容は、この藤原定家たち十三世紀（すなわち鎌倉初期）に大きな節目があるように思われるのである。

注

- (1) この紀年は原文（中華書局一九七七年排印本）に拠る。正確にはその前年たる太平興国八年（一九八三）到着入京、雍熙三年（一九八六）帰国。笠井章介『東アジア往還・漢詩と外交』（朝日新聞社一九九五年）および上川通夫「喬然入宋の歴史の意義」（『愛知県立大学文学部論集』第五〇号「日本文化学科編第四号」二〇〇一年）等を参照。
- (2) 訳注として石原道博編訳『新訂旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』（岩波文庫一九八六年）を参照。またこの喬然の記事は、宋初の文人楊億（九七四～一〇二〇）口述『楊文公談苑』にも抄録されている。李裕民輯校『楊文公談苑』（上海古籍出版社一九九三年）参照。
- (3) 原文（注1所掲）「職員今」に誤る。中華書局本校注および石原道博訳注（注2所掲）に従つて改める。
- (4) 原文「國中有五經書及佛經、白居易集七十卷、並得自中國。」この一文は『楊文公談苑』（注2所掲）にも「國有五經及釋氏經教、並得於中國、有白居易集七十卷」と見える。
- (5) 日本における白氏文集の伝来と流行については、その最も早い記録として金沢文庫旧蔵本『白氏文集』（存二五五卷）の若干巻に転抄される天台僧慧尊の「会昌四年（八四四）筆写」の奥書が有名であるが、さらにこの喬然の発言が決して誇大なものではない証拠に、寛平三年（八九一）以前の編集とされる藤原佐世『日本国見在書目録』の「別集家」目最終行に「白氏文集七十 元氏長慶集廿五 白氏長慶集廿九卷」（は合点記号）と締めくくられていることも見逃せない。また、入宋に際して喬然は宋朝の図書や出版の状況をかなり細かい部分まで知悉していたように思われる。『宋史』に記載される喬然の献上品目には、金鑲紅羅の標（＝表紙）に水晶を軸とした『鄭氏注孝經』一卷と『越王孝經新義』第十五（唐太宗の子越王貞撰、記室參軍任希古等の新義）一卷とがあったという。これを

以て「宋史」日本伝の編述者は「其の国は多く中国典籍を有す」と記しているのである。

- (6) 清乾隆の李調元輯『函海』所収。張為の経歴は傅璇琮主編『唐才子伝校箋』（中華書局一九九〇年）参照。
- (7) 『四部叢刊初編』所収。原文は「國朝能爲歌詩者不少、獨李太白爲稱首。蓋氣骨高舉、不失頌美風刺之道焉。厥後白樂天『諷諫五十篇』亦一時之奇逸極言。昔張爲作詩圖五層、以白氏爲廣大教化主、不錯矣。」と。
- (8) 『蜀版大蔵経』（いわゆる開宝蔵）は、宋の開宝五年（一九七二）雕造開始、太平興国二年（一九七七）に完成したとされる。竺沙雅章『宋元仏教文化史研究』（汲古書院二〇〇〇年）その第一部「宋元版大蔵経の系譜」参照。
- (9) 『白氏文集』序巻および『元稹集』巻五十一所収。
- (10) 『菅家文章』巻二「余近叙詩情怨一篇呈首十一著作郎。長句二首偶然見訓。更依本韻重以答謝」〔作品番号一一九〕其二の自注に見える。原文は「來章曰『蒼蠅舊讀元台辨、白體新詩大使裁』。注云、近來有聞、裴頌云『禮部侍郎得白氏之體』。余讀此二句、感上句之不欺、兼下文之多詐。訓和之次、聊述本情。余心無一德、身有三官、摠而言之、事縁恩獎。更被勅旨、假號禮部侍郎、與渤海入覲大使裴頌相唱和、詩惣九首、追以慙愧。故有此四句。」
- (11) 『名賢十抄詩』およびその注釈書『夾注名賢十抄詩』については、芳村弘道「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』の基礎的考察」（立命館大学中国藝文研究会『学林』第三十九号、二〇〇四年）および査屏球「新補『全唐詩』一百首——高麗『十抄詩』中所存唐人佚詩」（『従游士到儒士 漢唐士風と文風論稿』所収。復旦大学出版社二〇〇五年）を参照。特に『十抄詩』成書年代について査氏は、序文中の「東都」という地名に着目し、高麗初期の九八七年より一〇一二年までの間慶州がこのように呼ばれていたことから、該書を一〇〇〇年前後の成立と推定している。
- (12) 新聞一美『源氏物語と白居易の文学』、同『平安朝文学と漢詩文』（ともに和泉書院二〇〇三年）等参照。
- (13) 定家の歌論書『毎月抄』に「白氏文集の第一第二帙の中に大要侍り。かれを披見せよ。」とあり、また『詠歌大概』にも「白氏文集第一第二帙、常可握翫。（小字注）深通和歌之心」とある。
- (14) 定家自筆の当該部分は、現天理図書館所蔵。辻彦三郎『藤原定家明月記の研究』（吉川弘文館一九七七年）口絵参照。
- (15) 白詩原文は以下の通り。「紅旗破賊非吾事、黄紙除書無我名。唯共高陽劉處士、圍棋賭酒到天明。」
- (16) 冷泉家時雨亭叢書『明月記』全五冊（朝日新聞社一九九三―二〇〇三年）の自筆本影印参照。

- (17) 拙著『白居易「諷諭詩」の研究』(勉誠出版二〇〇〇年) 上篇第一章「白居易と杜甫」人生七十古來稀」句」参照。
- (18) 『新編国歌大観 私家集編』(角川書店一九八五年) 所収「拾遺愚草員外」に見える。なお研究書として浅野春江『定家と白氏文集』(教育出版センター一九九三年)、佐藤恒雄・藤原定家研究『(風間書房二〇〇一年)、雋雪艶』藤原定家『文集百首』の比較文学的研究』(汲古書院二〇〇二年)等を参照した。
- (19) 『文集』とは「白氏文集を略称したもの」ではなく、本来『文集』とのみ称せられ、後に他の別集と区別するために「白氏文集」と呼ばれるようになったとされる。太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』(勉誠社一九九七年) 上巻第二章第一節「その受容を繞る諸問題」参照。
- (20) 慈円の作品は『新編国歌大観 私家集編』(注18所掲) 所収「拾玉集」に見える。また多賀宗準『校本拾玉集』(吉川弘文館一九七一年)、石川一『慈円『文集百首』考』(和漢比較文学叢書13『新古今集と漢文学』所収。汲古書院一九九二年)等を参照。なお、定家とは別に、寂身(一一九〇?)という若い僧も四〇題のみを共作している。これについては『新編国歌大観 私家集編』(角川書店一九八九年) 所収「寂身法師集」参照。
- (21) 前掲注18参照。
- (22) 白詩全文は以下の通り。「久病曠心賞、今朝一登山。山秋雲物冷、稱我清羸顏。白石臥可枕、青蘿行可攀。意中如有得、盡日不欲還。人生無幾何、如寄天地間。心有千載憂、身無一日閑。何時解塵網、此地來掩關。」
- (23) この他にも、慈円が白詩句を対句で掲げている部分を、定家が隻句のみを題として詠んでいる例が百首中十二例(10、13、17、19、20、27、33、37、50、51、58、63)、慈円題四句に対し定家題一句に削るもの三例(65、71、73)、一句に削るもの一例(95)がある。これらも単に慈円の原題を略記したものとは考えられないであろう。ちなみに寂身の四題は全て慈円句題と同文である。
- (24) 神鷹徳治『国書所載の漢籍の本文について』『文集百首』を中心として、「中国読書人の政治と文学」所収。創文社二〇〇二年)。
- (25) 慈円・定家・寂身の『文集百首』には、後世の転写の際に生じたケアレスな筆誤による異文が多い。その異同の詳細は佐藤恒雄氏著書(注18所掲)三三九〜三四〇頁『文集百首』詩句校異表』に簡便に纏められている。

- (26) 『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』 文学篇第二十一卷（臨川書店二〇〇一年）所収。
- (27) 歴博本「苦」字の右旁には「八ナハタ」、左旁には「タル」の訓注がある。なお名古屋蓬左文庫所蔵那波本『白氏文集』には、諸刊本通り本文を「空」字に印するが、その右旁に「八ナハタ」との書き入れが存在する。明らかに空字の訓ではない。恐らく金沢文庫旧蔵本（現歴博本）を直接目睹した人物の転写と推定される。
- (28) このほか神鷹氏論文（注24所掲）では、『文集百首』其21句題「青苔地上消殘雨、緑樹陰前逐晚涼」（白三二六四詩）、および凡五題に分けて引用される「長恨歌」の本文をもとに慈円・定家披見のテキストが旧鈔本の系統に属することを論証された。ちなみに「長恨歌」より摘録された句題は以下の通り。其31「遅遅鐘漏初長夜、耿耿星河欲曙天」、其52「夕殿螢飛思悄然、秋燈挑盡未能眠」、其53「行宮見月傷心色」（刊本との異同なし）、其54「夜雨聞猿斷腸聲」、其55「舊枕古衾誰與共」。
- (29) 天台僧慧萼が『白氏文集』を筆写した唐会昌四年「八四四」（注5参照）は、我が国仁明天皇の承和十一年に当たり、無事帰朝を果たしたのは大中元年「八四七」すなわち承和十四年七月である。橋本進吉「慧萼和尚年譜」（著作集12『伝記・典籍研究』所収。岩波書店一九七二年）参照。
- (30) なお、定家が旧鈔本『白氏文集』を見ていたことは、本稿上述のほか、自筆本も残る源氏物語の古注釈『奥入』所引の白詩本文からも検証される。神鷹徳治「源氏物語奥入」所引「長恨歌」の本文系統について」（『東京書籍』『高校通信東書国語』第二六五号、一九八六年九月）参照。特に奥入所引「長恨歌」は、「ふるき枕ふるき衾、誰と共にか」（源氏・葵）の出典（『舊枕故衾誰與共』）となるためにも、旧鈔本系統の本文が必要である。本稿後述。
- (31) 金卿東「韓国における白居易」（日訳は丸山茂、『白居易研究講座』第五巻、勉誠社一九九四年）、また同氏「高麗朝の詩人李奎報における白詩受容」（九州大学COE国際シンポジウム「東アジアの中の白楽天」予稿集二〇〇四年十一月十三日、なお同予稿文はのち和漢比較文学会「和漢比較文学」三十四号にも再録、二〇〇五年二月）。
- (32) 前掲注31九大COEシンポジウム報告時の金氏配布資料に基づく。
- (33) 高麗文人における宋詩風の流行については鄭増謨「高麗朝における杜詩受容 李奎報を中心として」（『京都大学中国文学報』第六十九冊、二〇〇五年四月）参照。

- (34) 前掲注26『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書』文学篇21その六十八頁参照。なお本詩巻奥書には「寛喜三年「三三」正月廿八日書之、但馬房書寫之、」同二月二日加點了、左金吾校尉原奉重、「嘉禎二年「三三六」三月十一日比較唐本了」、「建長四年「三五三」正月三日傳下貴所御本校點又了」の四つの記述がある。本稿にいう第二次校勘時とは奥書の時点をいう。また、現在前田育徳会尊経閣文庫所蔵那波本『白氏文集』は、江戸初期の天海僧正（?）一六四三の書入れを有する貴重な校本であるが、この天海本の巻十四にはA「保安二年「三三三」六月十四日以平祐俊之本拭汗自點了、藤宗重」、B「元亨三年「三三三」九月廿四日以 本點了、性全」「…一字不明、謠か?」二行の奥書が記されており、当該「江樓月」詩第一行上欄外にはまさしく「池」字の校記が見える。
- (35) なお九世紀、すなわち印刷本『白氏文集』流入以前の朝鮮半島では、日本と同じく旧鈔本系統のテキストが読まれていたであろうことは、前掲注9所引のいわゆる「雞林の賈人」の一事を以て十分に推測される。
- (36) その一証として、金沢文庫旧蔵本の校訂者豊原奉重のたび重なる校訂作業が挙げられる。奥書によれば奉重は、寛喜三年「三三三」〜貞永元年「三三三」、嘉禎二年「三三六」、そして建長四年「三五三」の都合三次にわたって『白氏文集』を筆写・校訂したが、の校訂は「唐本」（旁注では摺本）、の校訂は「傳下貴所之御本」に拠るとする。しかも「摺本」の異文は、本文脇に旁注されるのみで、多くは正文とは認定していないように見受けられる。奉重が「伝え下せし貴所on the spotの御本」による再校を欲した理由は、宋より渡来した刊本があまりにも誤謬字を多く含むためではなからうか。なお いろいろ「貴所」とは「冷泉宮」であるとの朱筆が金沢本巻四十七と巻五十二にある。すなわち定家の子藤原為家の所蔵本と考えてよいが、専家の示教を仰ぎたい。
- (37) なお、かかる朝鮮半島の『白氏文集』もまた、この時を分岐点として中国本土の『白氏文集』のテキスト改変の流れと切り離されることになる。十六世紀末、秀吉の壬辰・丁酉倭乱（文禄・慶長の役）によって収奪された朝鮮版『白氏文集』が、当時もはや中国本土には伝存しない「前集後集本」であり、それが京の那波道円によって覆刻出版されたことは、朝鮮半島における『白氏文集』の書誌的な流れを知る上で、象徴的な事実である。